丘友會報

発行　亀山市本町
亀山高校内
丘友会
（会長　森信夫）
編集　丘友会事務局
印刷　オリエンタル印刷

亀高創立六十周年
記念行事今秋挙行
十一月十二・十三の両日

昨年亀山高校創立六十周年記念事業実行委員会（委員長森信夫丘友会会長）が正式に発足してから一年が経過した。その間、記念事業の一環である新体育館もこの春竣工し、この秋には盛大に記念行事が挙行されることになった。また、「亀山高校六十年史」の編纂も終って印刷の段階に入り、十月末にはほぼ八〇〇頁の校史が完成する予定である。

12日 記念式典・講演
13日 バレーボール招待試合

十一月十二日（金）の午前中には、県知事・県会議長・県教育委員長・同教育長・教委関係者・県下高校長・地元市町村首長・地元県会議員・地元小中校校長・母校旧職員・同PTA関係者・同丘友会関係者らを招き、全校生徒・職員が参加して、記念式典が新体育館で挙行される。式典では、永年勤続者の表彰・功労者への感謝状贈呈も行なわれる予定である。

同日午後一時からは評論家扇谷正造氏による記念講演が行なわれる。演題は、「一木の母の臍にも―吉川英治氏と現代―」。講演会には式典参列者のほか、卒業生や一般PTA会員も出席できるが、卒業生については同封の入場整理券が必要である。

十三日（土）午前十時から、バレーボール日本リーグの鐘紡チームの招待試合が行なわれる。これも入場整理券が必要である。

募金活動については、同封の文書にあるように、日標額一、五〇〇万円に対し五月二十日現在六〇〇万円にとどまっており、丘友会会員の一層の協力が期待されている。

十月末 校史刊行の運び

足かけ三年にわたる校史「亀山高校六十年史」の編纂作業も、校内外の協力を得てようやく一段落し、去る四月には四〇〇字詰原稿用紙二、八〇〇枚にのぼる原稿が印刷会社（オリエンタル印刷）に渡され現在版組みが着々進行中であり、今後校正作業を経て十月末にはB5版八〇〇頁の校史が刊行される予定である。この校史の資料的価値はいうに及ばず、今後の亀高教育の原点としてその真価を充分発揮するものと期待されており、また丘友会会員の絆をますます強めるために多くの会員が購読されることが期待されている。

総会のお知らせ

第二十五回丘友会総会を次のように開催いたします。

秋には六十周年記念行事が予定されており、本会もこれを期に大きな飛躍を遂げるべき時を迎えています。

暑い最中ですが、万障おくりあわせの上、是非出席して下さいますようお願いいたします。なおこれをもって正式通知とし、各会員宛には、案内状をさしあげませんからご了承ください。

一、日時　八月八日（日）午前十時より
一、場所　母校一棟　大会議室
一、協議事項
○56年度経過報告・会計報告に関する件
○57年度事業計画・予算案に関する件
○六十周年記念行事に関する件
○その他

なお、総会終了（十二時の予定）後、記念撮影、懇親会を行ないます。ご出席の会員には昼食の用意をさせていただきますのでお含みおき下さい。

卒業五年後から
会報配布は希望者のみ
役員会で決定

去る五月八日、丘友会役員会が母校で開かれた。案件として、前年度事業報告に関する件、同決算報告に関する件、五十七年度役員に関する件、同事業計画に関する件、同予算案に関する件、丘友会林に関する件会報発行に関する件、名簿発行に関する件等が審議され、八月の総会で正式決定される運びとなった。

五十七年度丘友会役員の人選については、前年度どおり、会長に森信夫氏、副会長に鈴木幸子氏・伊藤雅雄・吉田正彦・西川浩の諸氏が、書記には臼井俊乗氏が、会計には天野節子氏が監査には加藤ひろ・山口博福島俊三の諸氏がそれぞれ留任の方向で総会に臨むこととなった。また、会の実務にあたる事務局員（母校勤務）として、牛尾弘子・稲垣勉子・原田薫・坂キヌ子・山木栄子の五氏が承認された。

諸案件の中でとくに問題になったのは、丘友会の会報発行に関する件である。会報は毎年一回総会直前に発行されており、その経費は前年の母校卒業生（新入会員）が拠出する入会金、（一人二〇〇〇円、五十六年度末は総額九七〇、〇〇〇円）によってまかなわれている。しかし、郵便料金の値上げ、会員の増加（現在一六、六四九人）等によって、本年度は会報発行費だけで赤字（約五万円）になることが見込まれている。そこで役員会では、五十八年度から、卒業後五年間は全員に配布し、それ以後は希望者のみに配布するようにしてはどうかという案が出され、慎重審議の結果決定された。家族の中に複数の会員がいる場合はなるべく一通だけにしていただく等少しでも郵送料の負担を軽減したいとの意向であり、会員の了解が期待されている。

丘友会名簿（第六号）来秋発行
第一次調査に協力を

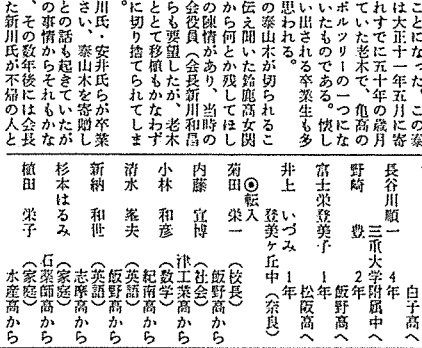
会則によって、丘友会会員名簿は五年に一度発行されることになっている。前号（第五号）が発行されたのは、昭和五十三年なので来年第六号が発行される予定である。事務局では、来年秋の発行をめざし、オリエンタル印刷と提携してその準備を始めた。

名簿の基礎資料になるのは、全員を対象とする（ただし、住所不明者は除く）第一次調査である（同封調査用ハガキ利用）。このさい名簿の購入予約をあわせて調査していただきます。ただし、五十三年度から五十七年度の卒業生は卒業時に名簿代を納入していただいていますので、全員（約二、五〇〇人）に配布します。

八月末には一次調査を打切り、以後第二次調査に入る。これは、一次調査での不明者をリストアップし、名簿購入希望者ならびに各年度のクラス幹事に配布して調査を依頼するものである。二次調査でも不明な会員について、さらに第三次調査を行ない、消息不明者の少い名簿の完成をめざすことになっている。

新体育館ついに完成

宿願の新体育館がついに完成し（総工費二億三〇〇〇万円）、五月初め頃から引渡しを受け、一、六四九㎡の広大な体育館で体育の授業、放課後の部活動、集会活動が活発に行なわれている。



新体育館は、練習用バレーボールコートが六面もとれ、一、五〇〇名の全校生徒を収容してもフロアーの三分の一は空いているほどの県下有数の広大なフロアーを誇っている。

しかし、体育用具・イス・カーテン・放送設備・照明設備等の内部設備のために、約二、二〇〇万円が必要で（一部は購入済）、この経費は県予算ではなく学校独自でまかなわなければならないため、六十周年記念事業実行委員会が中心となって募金活動が展開されている。丘友会々員の一層の協力が期待されている。

六十周年を記念し
泰山木を母校に寄贈
46・47年度の生徒会役員

去る六月二十日の日曜日元生徒会の副会長であった安井尚志氏らが母校を訪れ背たけ三メートルに及ぶ泰山木を三本、母校の校地内に植えていった。二本は管理棟の西側に、残る一本は運動場のバックネット裏にである。

安井氏らが生徒会の役員をしていたのは昭和四十七年で、その年新校舎の第二棟（理科・家政科棟）建設鈴鹿高女の管理棟）がとり壊されることになり、それに伴って鈴鹿高女の玄関東わき（亀高時代は自転車置場）にあった泰山木が切られることになった。この泰山木は大正十一年五月に寄贈されすでに五十年の歳月を経ていた老木で、亀高のシンボルツリーの一つになっていたものである。懐しく思い出される卒業生も多いと思われる。

この泰山木が切られることを伝え聞いた鈴鹿高女関係者から何とか残してほしいとの陳情があり、当時の生徒会役員（会長新川和昌氏）らも要望したが、老木のこととて移植もかなわずついに切り倒されてしまった。

新川氏、安井氏らが卒業するさい、泰山木を寄贈しようとの話も起きていたが諸般の事情からそれもかなわず、その数年後には会長だった新川氏が不帰の人となり、話はそのままになっていた。

母校が六十周年を迎えたことを耳にした安井氏らは新川氏の遺志を活かすためにもこのさい泰山木を寄贈しようと、四十六年・四十七年の生徒会役員に呼びかけて今回植樹の運びとなり十年ぶりに鈴鹿高女・亀山高校のシンボルツリーが復活したものである。

『亀山高校六十年史』の編纂を終えて
原田好雄

僅か二年余りの歳月では、到底不可能に思われた編纂作業が、専任二人兼任一人という少人数の担当者の精一杯の努力によって、どうにか、不完全ながらも、一区切りをつけ、これから第一・第二の校正を行い、十月末には『六十年史』を刊行できる目途がつくに至った。本当に胸を撫でおろす思いである。

編纂に当って、資料収集の関係で、前身校と亀山高等学校と、その形式が異にするが、あくまでも、一貫して、社会情勢の変化が、いかに学校教育に大きな影響を与え、それが教育制度の改革をもたらすかを常に考慮した。さらに、歴史の流れは、或る意味で、一定期間をおいて、繰り返えされ、それに反省を加える。

なお、この『六十年史』編纂に際して、学校当局は勿論、多数の学校関係者・卒業生の方々の惜しみない絶大な協力に感謝すると共に、立派な『六十年史』にするために、編纂委員三人は大いに今後も努力する覚悟である。（校史編纂係）

編纂委員の合意によって、亀山高等学校の場合、時代区分を行った。

尼大な資料収集が、休日も返上して行われた結果、今まで隅の目をみなかった、そしてやがてはそのままでは消滅してしまう運命にあったものが、収集され、活かされ、将来にわたって記録に留められたことは誠に幸いである。

ことによって発展するものであることを痛感し、編纂委員の方々に感謝すると共に、立派な『六十年史』にするために、編纂委員三人は大いに今後も努力する覚悟である。（校史編纂係）

母校職員の異動

◎転出
小林　尚志　3年（校長）へ
福岡　佳子　津西高
亀田　陽一　四日市農芸高へ
谷　晃　伊勢工業高へ
長谷川順一　三重大学附属中へ
野崎　豊　8年　白子高へ
富士栄登美子　2年　飯野高へ
井上　登美ヶ丘中（奈良）へ
菊田　栄一　1年　松阪高へ
内藤　宣博　（校長）飯野高から
小林　和彦　（教諭）津工業高から
清水　峯夫　（英語）紀南高から
新納　和世　（英語）飯野高から
杉本はるみ　（志摩高）
植田　栄子　（家庭）石薬師高から
（家庭）水産高から

◎転入
菊田　栄一　（校長）飯野高から
内藤　宣博　（社会）津工業高から
小林　和彦　（教諭）紀南高から
清水　峯夫　（英語）飯野高から
新納　和世　（英語）
杉本はるみ　（志摩高）
植田　栄子　（家庭）石薬師高から
（家庭）水産高から

亀高を生かす道

―亀高に対する提言を待つ―

長岡　昭

亀山高校も還暦を迎えました。十一月には盛大に記念式典が挙行される予定ですが、この際亀高の現状と問題的の一端を丘友会諸兄姉に訴えて、将来の亀高のために先輩諸兄姉からのよき提言を期待したいと思います。

亀高に転任して四半世紀の歳月を閲しました。その間の変遷をながめておりますと、その変化は急激であり、亀高のあるべき姿はなかなかわかりにくいことが分からなくなってきます。

会員の皆さんにお会いすると「過去のよき時代の亀高を再現してほしい」との声をしばしば耳にします。しからば現在の亀高はどうなっているのか。生徒数は県下で三番目に多く、いわゆるマンモス校です。一部の心ない生徒の非行は目につくことだろうと思いますが、全体的にみると亀高は実によい学校です。小学区制の廃止により質の変化を来したことは確かですが亀高の伝統である「人間性を大切にする、自主性を重んじる」という精神が学校の中に脈々と流れていますが、生徒の大多数は入学当初は劣等感を懐いていますこれは自分の長所がわからないからです。学校での教育は生徒個々人の長所を見付け出すことから始めますそれには「おまえは馬鹿だ」というような言葉は絶対に使わない。いや、そんな意識を教師自身が懐かないことが大切です。そんな目で生徒に接していると、どの生徒にも他の生徒にはない特徴があり長所があることを発見し驚かされるのです。

現在の亀高には木造校舎は全くなく、昔のおもかげをとどめるものはほとんどありません。これは時代の要請とはいえ寂しい限りです。昭和三十年代には図書館に改造して使用していたが、今から考えると風格のある建物であり、壊してしまった今本当に惜しいことをしたという感を強くします。樹木にしても松は松くい虫にやられ、大きな木は校舎建築の邪魔になるというので切られてしまいました。しかし古い歴史のある木は一本でも残そうという努力は続けていきます。毎年、卒業生は記念植樹をして将来の亀高を緑の学園にすることを夢みつつ頑張っています。

今、六十周年を迎えるに当り、丘友会諸兄姉の暖かいご援助により記念行事の計画が着々とすすめられていますが、この際、学校に対する提言などもどしどしお寄せいただきますことをお願い申し上げます。（定時制教頭）

早くから進路意識の啓発を

―亀高生の進路状況と意識―

進路指導室から最近の進路状況をお知らせします。

まず進学では、国公立共通一次試験以来、受験する大学をよりどころまで選択しないと合格しにくくなってきました。そのため生徒の能力と適性に合致した大学をみつけるための進学指導がより強化されなければなりません。本校では低学年からの進路意識の啓発に力を入れています。

また、大学卒の肩書きが以前ほど評価されなくなってきたから各種、専修学校への進学が少しずつ増加しています。女子では、短大と看護学校の希望が多く地元志向の強いのが特徴です。進学先が多種多様な方面にわたっていますので、それらの適確な情報収集に努め、生徒や担任が利用しやすいシステムを考慮中です。

次に就職については、普通科の就職者がやや増加しています。生徒の職業意識はやはり事務職希望が多く休日出勤や勤務時間の延長を嫌う傾向がみられます。しかし事務職の競争率は高く、特に男子では難しくなっています。いきおいブルーカラーへ流れますが最近は女子の軽作業も増えています。これらに対する抵抗は少なくなりつつあります。企業側も意欲のある生徒を歓迎し、実力主義の方針の風潮は憂慮すべき事態と考え、できるだけ早い時期に進路を決めさせ、その目標に向かって邁進することで生活に張りをもたせ、向上の意欲を喚起しようとがんばっています。

（進路指導部　西村柴二）

同窓会林

副会長　鈴木幸子

丘友会の皆様、お元気でいらっしゃいますか。

この秋に予定しています母校創立六十周年の記念事業のあと、昨年より会員の皆様に多額のご寄附をお願い申し上げておりますが、時節柄何かと出費のかさみます中をまげてご理解とご賛同を頂き早速にご送金下さいまして、誠に有難く厚くお礼申し上げます。尚又、各地区で募金の為にご尽力頂いています委員の皆様に対しましては、深甚の感謝を申し上げます。お蔭をもちまして募金額は次第に伸びておりますが、まだ目標額には程遠い状況でございますので何卒一人でも多くの会員の方が募金にご協力下さいまして、意義深い六十周年の記念の事業を立派に挙行出来ますよう、温いご支援をお願い申し上げます。

ところで、この度の記念事業費捻出のため、丘友会の財産となっております拓植町の同窓会林を買却してはどうかとの意見が総会及役員会で出ましたので、現場の調査も行い、いろいろ慎重に審議いたしました。この同窓会林は、今から四十年ばかり前鈴鹿高女時代の職員生徒一丸となっての勤労奉仕作業によって出来たものでありますのでその当時の生徒達の気持を察しますと、とても手放すには忍びないと思われます。

また、木材の市況からみましても今は売却することは不利と言うことでございますので、結局売却は一応見合わせることにし、丘友会員の心の故郷として大切に残そうではないかと言うことになりました。以上の結論を何卒御諒解下さいませ。

同窓会林の今後の処置につきましては御意見がございましたら役員会まで御寄せ下さいますようお願い申し上げます。

皇紀二千六百年の記念事業として拓植町御在住の中村克己先生御一家のお話をいただきまして、当時併設の三重県女子師範学校と共同ではじめられたとのことでございます。私事ではございませんが、私は当時、昭和十八九年の二年間、桑原校長先生のもとで母校の教諭として奉職しましたのでこの植林に参加し、今村日神先生方と合宿の炊事係を勤めたことを思い出します。桑原校長先生はじめ鳥居、池上、中村先生方の陣頭指揮をされているお姿が脳に浮び、感慨無量でございます。作業は荒地の急斜面なので手足に豆をつくったり、擦傷や切傷を負うような辛い作業でしたが、生徒達はよくそれに耐えなことでございました。

この同窓会林は、二町歩余りの面積の中に杉と檜の苗を植林したもので将来、立木伐採の時は拓植町に半額を納付することになっております。生徒達の手で植えられた苗は、既に樹齢四十年近くになり立派な成木に育っておりまして、これらの木々に生徒の皆さんの心が宿っているような気がいたします。

杉木立並び立ちたり
そのかみの
植えにし子らの
群像のごと
（元校長
後藤裕文先生作）

思い出の山の下刈り（昭和18年当時）

丘友会（同窓会）の皆さん、お元気でご活躍のことと拝察いたします。本会報を通じてごあいさつできることを感謝いたします。

すでにご承知のとおり本年は亀山高校の前身である鈴鹿高等女学校が創立されて、ちょうど六十周年にふさわしい記念すべき年であります。

また本年は、永年の悲願であった新体育館が竣工し、母校の教育施設、設備がほんとうに充実された意義ある年でもあります。

これを機会に更に母校の発展と充実を願うとともに、陰涼寺の丘の上で学んだ同窓の輪を一そう深めてゆこうと、PTAクラブ後援会の皆さんと協議を重ね、六十周年記念事業実行委員会が発足し、体育館の内装設備等充実資金に多くの会員の皆様方から多額のご寄付を頂戴しました。本当に有難とうございました。

会報をお借りして衷心よりお礼申しあげる次第でございます。

寄せられました浄財は施設の充実にあてられますが、在校生は言うに及ばず、今後次々と入学する後輩の生徒諸君がこの体育館で、みなさん方の母校愛の結晶である設備にふれ、体育文化活動に励んでくれることと思います。

伝統ある地域の青少年教育の場である母校亀高の進展と充実感を更に深くするものであります。

お互いに学校を卒業して時がたつにつれ、母校への愛着が強く感じられて来るものであります。

「想い出の多い人生ほど幸福である」という諺がありますが、まったくその通りかと思います。母校での想い出を大切にするとともに、会員が同窓のよしみを中心に親睦を深め、公私ともに相協力出来ることこそ大きな喜びであります。

六十周年を一つの機会に丘友会員相互の友愛と協力を更に広め、会のますますの進展と、皆様の一そうのご活躍を心から祈念して、ごあいさつと致します。

六十周年を迎えて

会長　森信夫

昭和56年度卒業生進路状況

課程／進路	普通科 人数	普通科 %	商業科 人数	商業科 %	家政科 人数	家政科 %	保育科 人数	保育科 %	全卒業生 人数	全卒業生 %
進学者	114	51.1	6	6.7	28	21.9	13	33.4	161	33.6
就職者	87	39.0	80	89.9	91	71.1	21	53.8	279	58.3
家業・家事	22	9.9	3	3.4	9	7.0	5	12.8	39	8.1
合計	223	100.0	89	100.0	128	100.0	39	100.0	479	100.0

課程／進路		男	女	計	普通科 男	普通科 女	商業科 男	商業科 女	家政科	保育科
大学（学部）	国立	1		1	1					
	公立									
	私立	34	11	45	34	11				
短大	国立		1	1		1				
	公立		1	1		1				
	私立		58	58		31		2	14	11
専修学校		16	21	38	14	8	2	1	10	2
各種学校		6	12	18	5	8	1		4	
小計		57	104	161	54	60	3	3	28	13
就職者		61	218	279	43	44	18	62	91	21
家業・家事		15	24	39	15	7		3	9	5
総計		133	346	479	112	111	21	68	128	39

◎就職者の産業別分類

業種＼課程・男女	男	女	計	普通科 男	普通科 女	商業科 男	商業科 女	家政科	保育科
金融・保険業		8	8		3		5		
製造業	35	67	102	24	15	11	27	24	1
卸・小売業	9	59	68	6	5	3	10	35	9
運輸・通信業	8	12	19	6	1	2	3	7	1
サービス業	4	63	67	3	17	1	13	23	10
公務	2	2	4	2	1		1		
その他	3	7	11	2	2	1	3	2	
合計	61	218	279	43	44	18	62	91	21

57年度東海総体

ウエイト、団体優勝

八月全国総体へ

去る六月十九・二十日の両日、愛知県を中心に開催された今年度の東海高校総合体育大会に県代表として出場した母校のウエイトリフティング部は、全員健闘みごと団体優勝をなしとげた。団体優勝は八年ぶりの快挙である。また、個人の部においても四名が優勝し一名が二位、他の一名が三位に入賞した。四階級制覇ははじめてのことである。

ウエイト部六名は、八月一回戦で今大会で優勝の岡崎女子高と対戦、善戦の末惜しくも敗退した。同部は県高校総体で三位になり、東海総体に駒を進めたものである。

ウエイトリフティングの個人入賞の結果は次の通りである。

52kg級　優勝　豊田広和
67.5kg級　優勝　森浩之
75kg級　232.5kg（大会新）優勝　嶋田正明
82.5kg級　二位　吉田茂
90kg級　優勝　黒川雅司
60kg級　三位　中井幸夫
110kg級　優勝　235kg
125kg級　215kg

バレー部（女子）惜しくも敗退

同じく東海総体に出場したバレーボール部女子は第一回戦で今大会で優勝の岡崎女子高と対戦、善戦の末惜しくも敗退した。同部は県高校総体で三位になり、東海総体に駒を進めたものである。

高校放送コンテスト県予選

放送部、最優秀に輝く

ラジオ番組製作部門

去る六月二十日、津工業高校で開催されたNHK杯全国高校放送コンテスト三重県予選において、母校放送部はラジオ番組製作自由部門（「無人駅！」）において、みごと最優秀（一位）の栄冠に輝き、同課題部門（「ずっと平行線」）で優秀（二位）に入賞した。同部は八月東京で開催される全国コンテストに県代表として出場する。

編集後記

◇「会報」十七号の編集を終えて、ほっとします。ただ経費の関係で、今後いつまで毎年発行が可能か、先行き予断を許さぬ。

◇元生徒会役員が拳山木を寄贈した話（一面）は、近来にない美談。亀高の卒業生も捨てたものではない。

◇本号出色の原稿は、長岡先生の「亀高を生かす道」であろう。声高に亀高の現状を論難するだけでは、事態は好転せぬ。「亀高の伝統は、人間性を大切にし自主性を重んずる精神である」と説かれる先生の視点を大切にしたい。（野田）